



写真-1 ニテコ池（下池）、前方の山は甲山（令和2年6月撮影）

■ 『火垂るの墓』の舞台となったニテコ池

高畑勲監督・脚本、スタジオジブリ制作のアニメ映画『火垂るの墓』が公開されたのは昭和 63（1988）年 4 月。野阪昭如の小説『火垂るの墓』をアニメ映画化したもので、昭和 20（1945）年の神戸市と西宮市を舞台に、両親を亡くした幼い兄妹が終戦前後の混乱の中を必死で生き抜こうとしますが、やがて力尽き息絶えていく姿を描いたものです。

昭和 20（1945）年 9 月 21 日、14 才の兄、清太は国鉄三ノ宮駅構内で衰弱死します。清太の所持品は錆びたドロップ缶。その中には 4 才の妹、節子の小さな骨片が入っています。駅員がドロップ缶を見つけ、無造作に草むらへ放り投げると、地面に落ちた缶からこぼれ落ちた遺骨のまわりに蛍がひとしきり飛び交い、やがて静まります。映画は、こんな冒頭シーンから始まります。

第二次大戦末期、武庫郡御影町（現・神戸市東灘区）に住んでいた 4 歳の節子とその兄・14 歳の清太は、6 月 5 日の神戸大空襲で母も家も失い、西宮市の叔母さんの家に身を寄せることになります。



写真-2 石屋川沿いの公園に建つ陶板画の碑

当初、共同生活はうまくいっていましたが、戦争が進むにつれて諍いが絶えなくなります。やむなく 2 人の兄妹は家を出て近くの貯水池のほとりにある防空壕の中で暮らし始めますが、配給は途切れがちになり、情報や近所付き合いもないために思うように食料が得られず、節子は徐々に栄養失調で弱っていきます。清太は、畑から野菜を盗んだり、空襲で避難して無人となった人家から食べ物を盗んだりして生き延び、やがて終戦を迎えます。

敗戦を知った清太は、父の所属する連合艦隊も壊滅したと聞かされショックを受けます。節子の状態はさらに悪化し、清太は銀行から貯金を下ろして食料の調達に走りますが既に手遅れで、幼い妹は終戦の7日後に短い生涯を閉じます。節子を茶毘に付した後、清太は防空壕を後にしますが、彼もまた栄養失調に冒されており、身寄りもなく国鉄三ノ宮駅構内に寝起きする戦災孤児の一人としてさびしく息を引き取ります。

このアニメ映画の中心舞台となった西宮の叔母さん宅近くの防空壕のある貯水池、それが、西宮市水道局が管理している満池谷（まんちだに）のニテコ池です（今、防空壕はありません）。清太と節子はお風呂帰りに池に立ち寄り、たくさんのホテルに見とれてしまいます。空襲警報が鳴ると一目散に池の防空壕へ逃げ込む清太。そんな清太に叔母さんは「そんなに命が惜しいのやったら防空壕に住んどったらエエのに。」…と冷たい罵声を浴びせ、やがて清太たちは叔母さん宅を出て、防空壕で生活を始めるのです。



写真-3 映画に出てくる特徴的な取水塔（中池）

ニテコ池周辺は戦前からの高級住宅街で、映画のラストシーンでは、「遁生の宿」の曲が流れる中、疎開先から戻ってきたお金持ちの家族の姿が出てきます。そんな世界とは対照的に、誰にもかまわれることなく、やがて衰弱してさびしく死んでいった幼いふたり。終戦前後の混乱期、誰もが自分一人生きるのに精いっぱいだった時代とはいえ、戦争のむごたらしさがひしひしと沁みてきます。

■ ニテコ池のいわれ

『火垂るの墓』の舞台となったニテコ池は、室町時代に「えべっさん」で有名な西宮神社の土堀を作るときに満池谷の土を掘り出して運び、その跡が池になったと伝えられています。土を運び出す時、「ネッテコイ、ネッテコイ」と掛け声をあげていたことから、「ネッテコイ」が「ネテコ」、さらに「ニテコ」となったというのが池の名の由来だそうです。

このあたりは甲陽断層の南側に位置し、地質は大阪層群の上部亜層群で、『兵庫の地質』編纂委員会の委員長をされた故藤田和夫先生が命名された「満池谷累層」と思われます。

かなり厚い海成粘土がみられ、この土が西宮神社の土堀づくりに使われたと思われます。ここから西宮神社までの運搬距離は約 1.5km です。

粘土を掘り取った跡の窪地を利用して造られたのがニテコ池です。洗戎川の上流にあって3段に仕切られた池、いわゆる「重ね池」で、上から上池・中池・下池と呼ばれています。

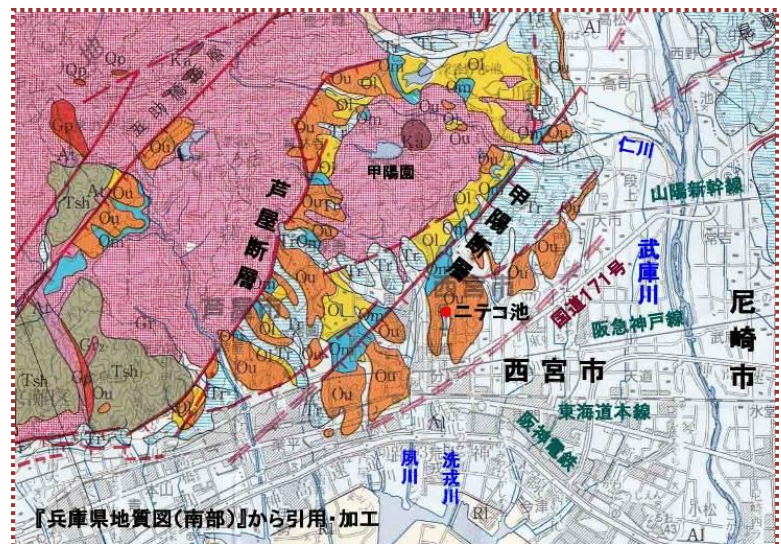


図-1 ニテコ池周辺の地質図

もとは農業用の溜池でしたが、大正 13 (1924) 年から上池と中池が水道用の貯水池として利用されるようになり、昭和 41 (1966) 年には下池も西宮市水道局に移管されました。

池の集水面積はわずか 0.27 km²、水はどこから引いてくるのでしょうか。

でも、この話を書くとき紙面が全然足らなくなるのでまたの機会にします。



写真-4 ニテコ池（上池）

■ 「日本三大土塀」のひとつ～西宮神社の大練塀

ニテコ池から運んだ粘土で築かれた西宮神社の土塀※¹は、境内の東側から南側にかけて、総延長 247m の長大な築地塀（つじべい）です。この塀は、版築（はんちく）工法※²を用いてつきあげた長さ約4m単位の築地塀を62基連ねたもので、壁面は細粒分が雨に洗われて流れ落ちたため、水平に堆積した砂礫層の断面を見るようです。

塀の厚さは平均 1.2～1.3m、壁の高さは 2.5m 程度で、立札には、『建立の年代は、先の大戦による損傷修理の際出土した宋銭・明銭により室町時代初期(約600年前)以前と推定され、現存最古の築地塀です。』



写真-5 西宮神社東側にある大練塀の立札

昔から京都三十三間堂の太閤塀、名古屋熱田神宮の信長塀と共に日本三大土塀の一つに数えられていますが、その規模、構造の堅牢さにおいて他に類例を見ない本邦第一の大練塀として、昭和 13（1938）年に国宝保存法（昭和 4 年制定、昭和 25 年廃止）に基づき国宝に指定されました。

その後、昭和 24（1949）年に起きた法隆寺金堂の火災と壁画の損傷を契機に、文化財の保護に関する総合的な法律として昭和 25（1950）年に文化財保護法が制定され、これに基づき“旧国宝”は重要文化財に認定されています。

兵庫県南部地震では東側の塀が損壊し、その後版築工法により修復されています。



写真-6 西宮神社

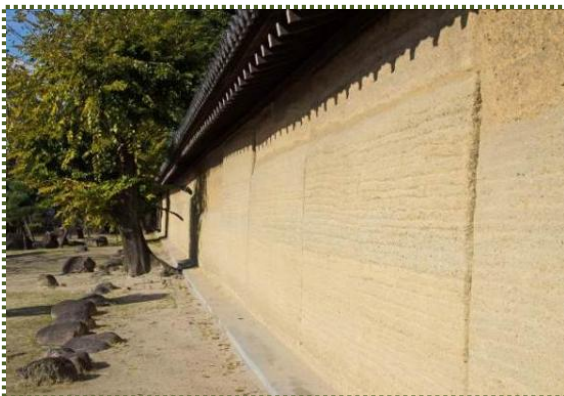


写真-7 西宮神社の大練塀



図-2 ニテコ池周辺の地図

※¹ 土塀：粘土質の土や泥に、石灰やフノリ、菜種油、水、藁などを加えて天然素材だけで作られた伝統的な塀である。

※² 版築工法：板で作った型枠に土を突き固め、何度も繰り返すその作業を行うことで土の層を積み上げていく技法。

■ ついでなので、ここで「三大土塀」の揃い踏み

① 熱田神宮の「信長塀」

熱田神宮（名古屋市熱田区）は、三種の神器の一つである草薙剣（くさなぎのつるぎ）が祀られていて、日本神話と関係が深い神社として知られ、伊勢神宮に次ぐ格別に尊いお社として篤い崇敬を集めています。



写真-8 熱田神宮・本宮

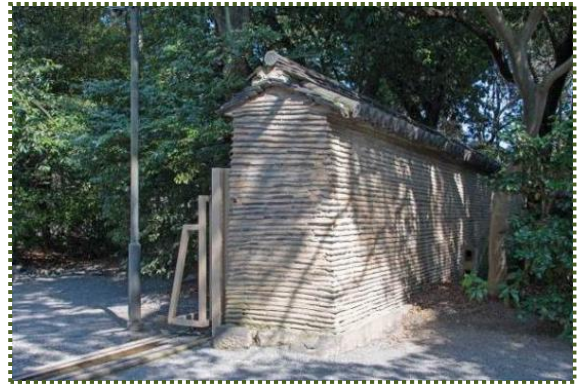


写真-9 熱田神宮・信長塀

神宮の正門を抜けてまっすぐ進んで行くと信長塀が見えてきます。そこを通過して中に入ると、右手に神楽殿、左手に神明造りの本宮があります。本宮の奥に本殿がありますが撮影禁止になっています。

写真-9 が熱田神宮の「信長塀」で、現地の説明板には以下のとおり記されています。

「永禄三（1560）年、織田信長が桶狭間出陣の際、当神宮に願文を奏し大勝したので、その御礼として奉納した塀である。土と石灰を油で練り固め、瓦を厚く積み重ねている。三十三間堂の太閤塀、西宮の大練塀を並び日本三大土塀の一つとして名高い。」

永禄 3（1560）年 5 月、駿河・遠江・三河を治める大大名であった今川義元が、尾張国への侵攻を開始します。これに対し、同年 5 月 19 日明け方、信長は居城であった清洲城を出立し、その迎撃に向かいます。同日午前 8 時頃熱田神宮に入った信長は、そこで軍を整えると戦勝祈願をしました。

その後信長は、今川義元本陣を攻撃して見事これを討ち取り大勝利を収めます（桶狭間の戦い）。信長は、戦勝の礼として、熱田神宮境内に 400m に及ぶ土塀を寄進しています。このとき寄進された土塀の一部（≒120m）が今も残っています。

② 三十三間堂の「太閤塀」

三十三間堂は、JR 京都駅から東の方へ約 1.1km 行った所にあります。太閤塀は、三十三間堂にある南大門に接する高さ約 5.2m、桁行 29 間（≒92m）の木骨土造・版築仕上げの築地塀です。「天正十六年八月大ふつ殿瓦」のへう書きがある瓦があり、また軒平瓦に太閤桐の文様が用いられていることから「太閤塀」と呼ばれ、南大門とともに豊臣家ゆかりの桃山気風に溢れたものです。ただ、現地には「太閤塀」の案内板が残念ながらありません。

造営の経緯は、以下のとおりです。

徳川家康を臣従させ、また関白・太政大臣の官職を得て日本統一を進めていた豊臣秀吉は、天下を統べる者の責務として、消失した東大寺大仏に代わる大仏の造立を考え、天正 16（1588）年、蓮華王院北側にあった浄土真宗・佛光寺派本山佛光寺の敷地内に高さ 20m の大仏と大仏殿（方広寺）の造立を決めます。

そして、文禄 4（1595）年、現在の方広寺境内に加え、現在の豊国神社・京都国立博物館・妙法院・智積院そして三十三間堂をも含む広大な寺域を有する方広寺を完成させます。

このとき、秀吉の寄進により三十三間堂の南端（方広寺の南限）の南大門に接して整備されたのが太閤塀です。もっとも、秀吉が整備した太閤塀は、文禄 5（1596）年 7 月 13 日に発生した慶長伏見地震で倒壊しており、現存する塀は豊臣秀頼が再建したものと言われています。



写真-10 三十三間堂



写真-11 太閤堀（右端が南大門）

■ 越水城の堀の役目を担ったニテコ池

昔、ニテコ池の東に越水城(にしみずじょう)という城があったそうで、大社小学校の南東の隅に「越水城址」と刻まれた石碑と説明板があります。元々、ここから北東に約 100m 行った所の民家の庭にあった石碑を移設したもので、元の位置には石碑のレプリカが置かれています。城山や越水という地名が残る今の大社小学校の東あたりの小高い丘が城址です。

この地は、京都から西に向かう西国街道が越水の村を通り、戦国時代、守るにも攻めるにも都合のよい平山城の適地でした。今の桜谷町の北あたりに本丸があり、矢倉や土塁、堀などを備えた、当時としては大きくてりっぱなお城だったそうです。

東側にある廣田神社の南は急な坂になっていて、西側は満池谷やニテコ池が堀の役割を果たしています。北側も山とがけがあって、南側は瀬戸内海まで見下ろせる高台（今は無理）ですから、理想的な地形だったといえます。



写真-12 大社小学校の「越水城址」碑

越水城について

目の前の小高い丘は観応 2 年（1351）足利尊氏と弟直義が戦った小清水の陣所跡で、瓦林正頼は永正 13 年（1516）ここに越水城を築城しました。いまの町名では城山・桜谷・満池谷・清水の 4 町にまたがり、その広さは南北約 200m・東西約 100m で小清水城あるいは越水城といわれていました。ここは西国街道の要衝で、城にかかせぬ水にも恵まれた築城の適地でした。

この城は、一説には天守閣もあり外堀を備え、人びとを住まわせた西宮には、城下町のような雰囲気があり、「おおよそ目を驚かす風情」で、摂津では他に例がなかったようです。応仁の乱に始まる戦国時代初期、城主正頼は細川氏の内紛に高国方につき、四国より京にのぼる澄元を迎えうって敗れ、その上、澄元に内通したとして切腹、死後澄元の家臣三好氏が入城しました。天文 2 年（1533）には瓦林と一向一揆が三好を攻めて城をうばい返し、瓦林の一族が城を守りますが、さらに攻防を繰り返されて、ついに畿内の覇者三好長慶の居城となり、彼は家臣松永久秀を京に止めて越水城で指揮をとりました。

永禄 9 年（1566）時の城主四国阿波の條原長房は、瓦林三河守に攻められ、一旦開城しますが 4 日後に復活、9 月には足利義親（のちの足利幕府 14 代將軍義栄）が入城しましたが、11 年に織田信長の入洛により、越水城の戦略的価値が消えました。

それから 330 年を経た明治 29 年（1896）12 月、この城跡に大社尋常小学校の新校舎が建ち、中村地区から移転した 3 学級 210 名の児童が勉強を始めました。深い緑の木立につつまれた新しい学校は、大阪湾をへだてて摂津・河内・和泉や紀伊の山やまを望む素晴らしい環境に恵まれた学校でした。

しかし、時代と共に発展する大社村（昭和 8 年 4 月西宮市に合併）の小学校としては狭くなり、大正 7 年（1918）11 月現在地に移りました。最早越水城は遠い思い出ですが、戦国の世以来こんこんと清水が湧き、城や地名のもととなった 3ヶ所の泉こそ越水城を語りつく証人として大切に保護したいものです。

平成 5 年 3 月 西宮市教育委員会

■ 兵庫県南部地震でニテコ池が被災、上堤が決壊し、中堤が決壊し、下堤は…

平成 7 (1995) 年 1 月 17 日に発生した兵庫県南部地震では、上池と中池の二つの土堰堤（上堤・中堤）が決壊し、上池、中池の 4 万 m^3 近い貯留水が泥流となって下池に流れ込みました。

地震時、上池と中池には 8 割程度の貯留水がありましたが、幸いにも下池は 10 年前から空だったため、流入してきた泥水を受け止め、ほぼ満水になった下池は、下堤中央部が陥没するとともに下流側に膨らみ亀裂が生じたものの何とか決壊は免れ、幸いにも下流の人家に被害が及ぶことはありませんでした。

ニテコ池の下流は、図-2 からわかるように人家が密集しているので、もし決壊していたらと思うとぞっとします。

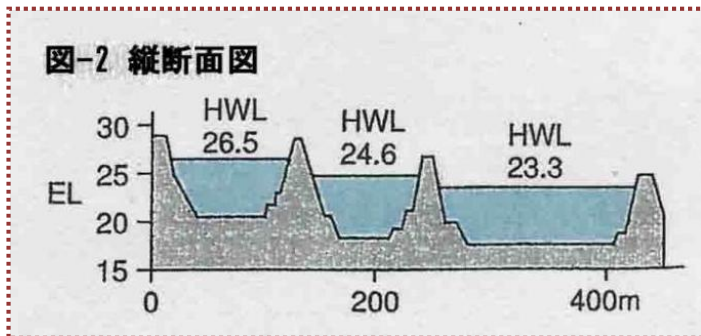


図-3 ニテコ池縦断面図



図-4 ニテコ池被災箇所位置図

(図-2,3「日経コンストラクション」1999.7から引用・加工)

復旧工事については、平成 7 (1995) 年の出水期までに災害防止対策を講じる必要があること、震災直後の工事であるため周辺の道路・交通事情が悪く、盛土材料等の資材搬入が容易でないこと、崩壊土砂は含水比が 20%以上と高くそのままでは盛土として使えないこと、といった課題がありました。



写真-13 ニテコ池 下堤の被災状況
(「阪神・淡路大震災 25 年事業
西宮市歴史資料写真展」から引用)



写真-14 ニテコ池 下堤
(令和 2 年 6 月撮影)



写真-15 ニテコ池 下堤天端
(令和 2 年 6 月撮影)

このような課題に対し、堤高約 7m の下堤は二重矢板締切工法を採用し、中詰土は含水比調整の時間がないことから購入土を使用、矢板の上下流側は現場発生土とクラッシャーランの混合土を使用して盛り立てています。また、上堤（堤高 $\approx$ 8m）、中堤（堤高 $\approx$ 8.5m）については、上流側の遮水ゾーンは現地土とクラッシャーランの混合土、下流ゾーンはクラッシャーラン単独で盛り立て、可能な限り現地発生土を利用しています。

工事は、洪水吐の改良や取水塔の復旧等も含め、平成 8 (1996) 年 9 月に無事完了しています。



写真-16 現在のニテコ池中堤

なお、上池の近くに西宮市の「越水浄水場」があり、そのすぐ南側の「西宮震災記念碑公園」の東隅には「阪神・淡路大震災 西宮市犠牲者追悼之碑」が建てられています。

阪神・淡路大震災の教訓を風化させることなく後世に伝えるとともに、震災で犠牲となった方の追悼の場とするために整備された公園施設です。

早いもので、震災から 31 年が経過しています。



写真-17 西宮市震災記念碑公園

■ モノローグ

ニテコ池（上池）の西にある名次神社は廣田神社の摂社で、古来より衣食住に関係の深い「水分神（みくまりのかみ）」を奉斎し、特に雨乞いに霊驗あらたかなる社だそうです。

昔は名次山の景勝地に鎮座していましたが、明治 41（1908）年に現在地に引っ越してこられたそうです。平安時代初期の文献にその名が見えることからかなりの古刹です。

ニテコ池の水は市の水道にも利用されていたことから、ニテコ池も名次神社のご加護を受けていたのかも。



写真-18 名次神社

ところで西宮市の水道事情ですが、南部地域は武庫川沿いの地下水（浅井戸、深井戸）を水源とする鳴尾浄水場で浄水処理した水と、琵琶湖・淀川を水源とする阪神水道企業団から購入した水道水でまかっています。

ニテコ池から取水した水などを浄化する越水浄水場は、平成 22（2010）年 3 月に浄水処理を休止しているそうです。なので、名次神社の神様はヒマを持て余しているのでは……。

なお、ニテコ池周辺は緑も多いことから、市街地にある貴重な水辺空間として周辺住民の憩いの場となっています。

パン（鶇）

ツル目クイナ科に分類される鳥。体長は 35 cm ほどでハトくらいの大きさ。湖沼・川・水田・湿地などに生息するが、公園の池などにも生息することがある。長い足を高く上げながら水際や浮いた水草の上を歩き回る。泳ぐことも水にもぐることできるが、足に水かきはなく、尾が高く上がった前のめりの姿勢でぎこちなく泳ぐ。食性は雑食性で、昆虫・甲殻類・植物の種などいろいろなものを食べる。「クルルッ」と大きな声で鳴き、この声から水田を外敵から守る「番」をしている鳥として名前の由来になったとされる。



写真-19 ニテコ池（中池）付近で餌を探していたパンを撮影

【参考資料】

- 1 『兵庫の地質』 兵庫県 平成 8 年 3 月
- 2 『日経コンストラクション〜ニテコ池』 日本経済新聞社 平成 11 年 7 月
- 3 『水道協会雑誌〜「報文」兵庫県南部地震によるニテコ池の被災状況と復旧工事』 深江学・吉村成幸・須藤憲蔵
(社)日本水道協会 平成 9 年 7 月
- 4 『阪神・淡路大震災に関する学術講演会論文集―土構造物の大変形挙動から推定した土の残留強度の報告』 平成 8 年 1 月
- 5 『【日本三大土堀】太閤堀・信長堀・大練堀』 「日本史あれこれ」HP 令和 6 年 9 月
https://love-japanese-history.com/earthen_wall/
- 6 『境内〜太閤堀』 三十三間堂HP <https://www.sanjusangendo.jp/precincts/taikoubei/>
- 7 『西宮市水道ビジョン』 西宮市水道局 平成 19 年 3 月
- 8 『「火垂るの墓」、越水城、土堀、熱田神宮、水分神、バン(鳥類)』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 25 (2013) 年 1 月 『ひょうご水百景』No.20

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』No.20